北を語る

秋 2008. 10 No.30
北を語る会
代表 渡會純价
事務局 札幌市東区北33条東6丁目2-28
㈱サン設計事務所内
TEL (011) 753-1622
FAX (011) 742-1888
印刷所 株式会社フロンティア企画印刷

世界は、きっと、変えられる

G8サミット市民フォーラム北海道共同代表を務めて

秋山孝二

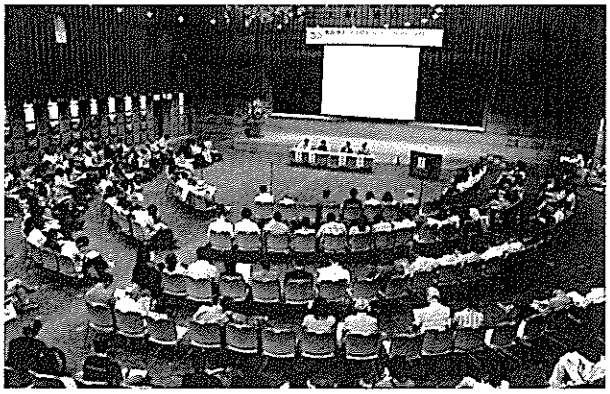
7月6日から3日間、札幌コンベンションセンター他で開催されたオルタナティブ（既存のものとは別なもう1つの）な「市民サミット」は、国内140のNGO会員からなる「2008年G8サミットNGOフォーラム」（星野昌子代表　以降NGOフォーラム)と、北海道の78NGOの正会員、協賛会員31団体・企業、197名からなる「G8サミット市民フォーラム北海道」（以降フォーラム北海道）の共催でした。「市民サミット」は札幌市の後援と、18の資金助成団体、43の協賛団体・企業からの支援を頂いて、40を越えるワークショップ・フォーラムの数々に、延べ2000人を越える参加者で盛況でした。　3日間の議論では、「気候変動」「生物多様性」「人権・平和」「貧困・開発」の大きな枠組みで、問題提起と意見交換が活発に為されました。

振り返ると、昨年9月21日に「フォーラム北海道」を設立して以来、私自身は二つの意味合いから、自分の使命を感じていました。

1）世代としての使命＝20世紀半ばに生まれた者として、これからの若い世代が夢を持ち続けられる社会・自然環境への努力を惜しまないこと。

2）北海道に育った者としての使命＝行政・企業とは異なった、本来の「市民セクター」として、北海道においてプラットホームの構築、そして世界との直接的なネットワークづくりの実践です。

永く企業セクターに身を置いた私は、少しでもこの市民活動への支援に、メディアを含めた地元民間企業が興味を持つべく、橋渡しの努力をするつもりでこの任をお引き受けしました。



発言者を円形で囲んだクロージング・シンポジウム

手始めの活動として、昨年10月29日に、内閣総理大臣、外務大臣、北海道知事宛に、「サミットに対する要望書」を提出しました。いわゆる「開催のあり方」に対する要望書です。内容は、1）市民に開かれたサミットの開催＝政策提言の事前打合せ、Civil G8の開催、イベント・デモ等の市民活動への理解、市民メディアセンター設立への協力等、2）環境と人権に配慮したサミットの開催＝会場周辺の環境保全、過剰警備・過剰交通規制反対、無駄な税金投入反対等、です。

次は今年1月に札幌市長に提出した「公園使用に関する要請書」です。活動自粛を促すとも受け取れる市役所の姿勢に対して、普段と変わらない公的空間での活動を強く要請しました。そして6月6日に、フォーラム北海道は北海道知事へ「政策提言」を提出し、更に北海道的課題への意見交換の場を要望しました。6月18日にはNGOフォーラムと共同で、首相官邸において「政策提言」を提出し、それに基づいて1時間半に渡って意見交

至った。神が人と決定的に違うのは、神が不死であることであるが、主神ゼウスの雷の前には為す術もなかった。しかし後になり、ゼウスはアスクレピオスを悼み、蛇遣い座として永遠に夜空に輝くことを許したという。黄道上の第12星座であって、山羊座の東、魚座の西に位置する。

アスクレピオスの死後も、弟子やその子孫達によって、ギリシャの各地にエピダウロスと同様の施設が作られ、活動が続けられた。ギリシャの医師達は、アスクレピオスを自分達の始祖として崇拝していた。古代ギリシャに興った医神アスクレピオスへの信仰は、時代を経て古代ローマへと伝わった。信仰が全盛期を迎えるのはヘレニズム時代となってからであり、実に紀元後6世紀まで地中海世界に生き続けた。

参　考

（1）立川昭二：神の手　人の手，人文書院，1995.

（2）カール・ケレーニイ（岡田寿之訳）：医神アスクレピオス，白水社，1997.

（3）澤田裕介：蘇る医神アスクレピオスの物語，医歯薬出版㈱，2001.

（札幌一条クリニック）

始まった選挙戦

横　路　由美子

9月15日、朝刊を開いて驚いた。札幌の某月刊雑誌の広告が載っていて「由美子夫人健康不安？横路氏引退か」という写真入りの見出し。休日の朝の8時だというのに、広告を見た従姉や友人から電話が来る。「この前元気だったのに具合悪いの？」と心配の電話だ。そうこうするうちに10時過ぎメール便が来てその某雑誌（名前も言いたくない）が届いた。読んでみてびっくり、1から10まで嘘ばかりで、書いた人の名前も発行人の名前もない。この大事な選挙戦を狙って、よくもまあこんなデッチ上げの文章を書き連ね、私がウツの持病持ちでそれが悪化して日常生活もままならないとやら、資産運用のため証券会社に相談に行ったとやら、10年も前の息子の居住地を書いた上に、後継ぎと言われたことも考えたこともない次男を登場させたり、候補者のイメージダウンを狙う選挙妨害と名誉毀損以外の何ものでもない。日本の今の現状を憂い、より良い社会へ向かって戦う選挙戦が、こんな次元に貶められるのは、何としても悔しい限りだ。裏で操っているのは何？正々堂々とやろうよと叫びたい気持ちである。

この経済状況の厳しい時に、2度にわたって「これ以上耐えられない」と無責任に総理の座を放り出した“政権党”のことを国民はそう簡単に忘れて、思惑通りご祝儀相場に易々と乗るものだろうか。国民の心意気を見せてほしいものである。

2006年6月22日、経済財政諮問会議で小泉さんの述べたことを忘れない。「社会保障費用は歳出をカットしてカットしてカットする。国民がどうかもう歳出カットをやめてください、増税してもいいですから社会保障制度を残してくださいと言うまでカットする」そして、その言葉の2日後、後期高齢者医療制度が衆議院で強行採決されたのである。

小泉改革の市場万能主義、新自由主義の進行の中で様々な日本社会のひずみが出てきている今、総裁選を戦っている全ての候補者が小泉、安倍、福田政権の閣僚であり、真っ只中にいた人達であるから、その結果責任に触れないまま、この先に夢だけ語っているのを見ると、劇場パフォーマンスには興醒めという人が多い。

守屋事務次官の汚職をはじめとする防衛省防衛費の暗い闇、汚染米で露出した農水省のいい加減さ、厚生年金記録の改ざん…国民は、原油を先頭に物価高、年金や医療・介護への不安と不満、パートや派遣の低賃金や不安定雇用といった先の見えない生活に苦しんでいる。官僚をコントロールし必要な所にきちんとお金の使える仕組みを作るには、政権交代で政・官・業の癒着構造を一度壊して作り直す以外に道はないと感じている。

私も中傷記事を乗り越えて、夫と共に頑張り抜きたいと決意している。真実が大切にされ、人と人とのあたたかい思いやりが満ちていく、そんな社会を目指したい。

（9月18日記）